

日蓮真蹟「土籠御書」の所在について

定方 晟

土籠御書は日蓮聖人が佐渡の配所に出発する前日に相模の依智^{えち}で書き、鎌倉の牢に幽閉されている弟子の日朗（筑後房）に送った手紙である。多くの読者が弟子を思う聖人の心の優しさに感銘を受けている。手紙の内容はつぎのとおりである。

日蓮は明日、佐渡の国へまかるなり。今夜のさむきに付ても、ろうのうちのありさま、思やられていたはしくこそ候へ。あはれ殿は、法花経一部（を）色心二法ともにあそばしたる御身なれば、父母六親一切衆生をもたすけ給ふべき御身なり。法花経を余人のよみ候は、口ばかりことはばかりはよめども心はよまず。心はよめども身によまず。色心二法ともにあそばされたるこそ貴く候へ。天諸童子以為給使刀杖不加毒不能害と説れて候へば、別の事はあるべからず。籠をばし出させ候はば、とく／＼きたり給へ。見たてまつり、見えたてまつらん。恐々謹

言。

文永八年 辛未 十月九日

日蓮（花押）

筑後殿

この手紙は今日、写しだけが知られ、原物は所在不明とされている（宮崎英修編『日蓮辞典』東京堂出版、一九七八年、一七四ページ）。ただし、最近、「現存する」という記述も現れた（朝日新聞社編『日本歴史人物事典』一九九四年、一二七三ページ）。いずれにしても、この歴史的な資料の存在は東海大学名誉教授・長谷川泰司氏によっていま余すところなく明らかにされようとしている。

この手紙は氏の家に伝わっていた。織田信長の命で行われた浄土宗と日蓮宗の「安土宗論」において、宗論の準備・監督の任に当たった信長の近臣・長谷川竹^{たけ}（後年豊臣秀吉の中堅大名の一人となった長谷川藤五郎^{とうご}秀一^{ひでかず}）が氏の先祖だったのである。手紙の由来に関

しては同家に明確な記録も申し送りもなかったが、氏の学者としての力量が手紙の由来を明らかにした。私は氏の姻戚としてこの資料を目にする機会があった。二〇×四〇センチくらいの手紙が錦の布の上に貼られ、それがさらに金箔つきの紙の上に貼られ、全体が木の枠にはめられていた。裏には明治二十年頃の補修の跡があったという。日蓮遺文集の真蹟の写真（とくに田村芳朗編『日本の思想 4・日蓮集』筑摩書房、一九六九、の巻頭の妙覚寺蔵・日蓮真蹟「五人土籠御書」の写真）と対照すると、手紙は素人の私にも真蹟らしく見える。

氏は二十年前からその道の専門家たちにこの手紙やその写真を見せてきたが、いまだに学界の話題にならない。私は氏に専門誌への発表を勧めていたが、氏は最近になって『天下布武』（織田信長家臣団研究会、第十二号、平成十一年）という同人雑誌に発表を行った。しかし、残念なことに写真が不鮮明である。私は氏に仏教専門誌『大法輪』への発表を勧め、氏の文を同誌に紹介した。同誌は掲載を一旦は承諾したが、念のため日蓮の書の権威である中尾堯氏に写真を見せたところ、江戸時代の写しだといわれ、掲載を断ってきた。しかし、私には、長谷川氏の調査に照らしあわせ、手紙が真蹟である可能性は依然として大きいと思う。広く学界に紹介して、専門家のさらなる検討に供するゆえんである。

長谷川氏は、朝日新聞社の『日本歴史人物事典』に「現存する」という記事が登場したのは氏が専門家たちに手紙を見せた結果ではないかと想像している。この想像が当たっていれば、この資料はすでにどこかで紹介されたことが考えられる。しかし、それでも、私の紹介は無意味にならないだろう。なぜなら、氏の論文は資料の信

憑性を裏づけるものとしてユニークであり、不可欠であると思われるからである。

なお、手紙の写真について一言したい。長谷川氏はこの手紙を京都の本能寺に奉納したが、奉納するにあたって表具師に表装を依頼した。その際、表具師は薬品を用いて漂白したので、紙は白っぽくなり、変色の跡や虫食いの跡が消えてしまった。中尾氏がこれの写真を見て「江戸時代の写し」と考えたのもやむを得ないと長谷川氏はいっている。

そこで、この発表では、表装前の写真と表装後の写真を掲載することにする。（一）は長谷川氏が表装前に氏のカメラで撮影したカラー写真であり、虫食いの跡が写っている。この写真は不鮮明なので、『大法輪』では使用不能といわれた。カラーで掲載すればこの欠点は補えるかと思う、紀要にはカラーでの掲載をお願いした。（二）は写真専門家が表装後に撮影したカラー写真である。

なお長谷川秀一の画像も掲載しておく。天正十六年、秀一が狩野派の絵師に描かせ、自らの菩提寺である福井市永昌寺に納めたもの。永昌寺蔵。この写真は土籠御書の真蹟の証明には何の関係もないが、この機会に紹介しておこう。長谷川秀一については講談社『大日本人名辞書』の長谷川秀一の項を参照されたい。

長谷川家に伝わった日蓮上人の「土籠御書」（真蹟）について

私が、信長公の小姓の一人、長谷川竹、後年、豊臣秀吉公の中堅

長谷川 泰 司

大名となった長谷川藤五郎秀一の直系の子孫であることを裏づける資料となった、日蓮上人の「土籠御書」について述べてみよう。

昭和四十一年夏から約八ヶ月滞仏した（私はフランス語教員で平成七年、三十五年間勤務した東海大学を定年退職した）留守に、一人の叔母が亡くなり、私の帰国後、生前の約束により、叔母が河内松原市に建てた、小さな家を私が相続したのであるが、その家の室内の壁に、木の枠で囲った御書が掲げてあった。紙は薄茶色に変色しており、かなり古い時代に書かれたもののように見えたので、当時、亡妻と私が住んでいた平塚市北金目の東海大学第一職員住宅（四階建ての集合住宅）に運んだ。

その頃、同じ職員住宅に池上尊義氏（現在、熊本の日蓮宗本妙寺住職をしておられる筈）が、日本史の教員として住んでおられたので、氏に御書をお見せしたところ（氏は立正大学出身で日蓮宗の僧侶でもあった）。「日蓮上人の筆蹟によく似ている」と言われた。

土籠御書の真筆が関西地方で見つかっても不思議はないとも言われた。当時私には、その言葉の意味はよく分からなかったが、後年、日蓮上人及日蓮宗についての私の知識が増すにつれて、納得できるようになった。又、池上先生から鈴木一成著「日蓮聖人遺文の文献学的研究」を借り受け調べてみると、土籠御書の真蹟は所在不明とあった。

「土籠御書」とは、日蓮上人が竜の口（鎌倉幕府の刑場）で頸切られんとしたが、幕府の方針変更により佐渡ヶ島へ流罪と決まり、相模国依智の本間の邸に預けられた。佐渡へ旅立つ前日（文永八年十月九日）佐介ヶ谷の土牢に捕らえられている弟子日朗宛に認めた手紙である。身にしみる初冬の寒さに牢内にあって心を痛めている

であろう弟子の身を案じ、法華経色説の功德をたたえて、激励の言葉を贈り、再会の時を約された温情の書である。（この部分は兜木正享校注「日蓮文集」岩波文庫から引用した）

この手紙を受け取った日朗上人（池上の本門寺の開山）が、彼の一番弟子であった日像上人（京都妙顕寺の開山）に、この手紙を与え、励ましたであろうことは、十分想像できる。以後三百年間、「土籠御書」は、妙顕寺の寺宝の一つとなったであろう。と言うのは、私が妙顕寺に問い合わせ、確認したわけではないからである。その妙顕寺から、何かの事情で流出し、長谷川家の先祖が入手し、子孫に伝えたと考えることが出来るからである。

所で、私達の長谷川家は、昭和二十年三月（私が中学三年の時、軍需工場に通年動員中であつた）の大阪大空襲で明治四十三年以来住んでいた家（借家）を焼かれ、一人の叔母の夫の出身地である備後府中町へ疎開したことがある。土籠御書を始め、先祖から伝わった品々は、幾つかの場所に預けておいて、焼失を免れたものである。

昭和四十二年以来、先祖伝来の品々を私の手許に集めることに努めた。私より早く東京に来て、和菓子職人の妻となっていた長姉の家にあった、宝暦の年号の入った日蓮宗の曼陀羅（掛軸）、江戸時代武家屋敷の中の、作りつけの仏壇の奥に吊したと思われる日蓮宗の古い本尊、この二つを返却してもらった。

昭和四十七年には、前述の叔母の妹である別の叔母（一生結婚せず、七十五歳で亡くなった）が豊中市庄内で亡くなり、葬式の後、約一週間私達夫婦は、その家に住んだが、そこには、楽焼長次郎九代目の銘の入った黒色の抹茶茶碗一個と幕末に伊勢松坂で森有節が

復興した万古焼の煎茶器の一部があった。私の父が、仲のよかった、その叔母に与えていたらしい。いずれも、曾祖父が幕末、名古屋から大阪へ移住した時、持参したものであろう。

昭和六十年に名古屋へ行き、蓬左文庫、鶴舞図書館で尾張徳川藩分限帳を調べ、弘化四年に大阪九条村で亡くなった、我々の曾祖父長谷川佐兵衛が尾張徳川藩士長谷川安右衛門家の相続人、長谷川須右衛門であることを知った。大阪へ移住後、町人らしく佐兵衛と改名したらしい。また、初代長谷川安右衛門（犬山城番）が豊臣大名長谷川秀一の孫（次男の子）であることも知った。

豊臣大名長谷川秀一の事績を調べていくうちに、日蓮上人の「土籠御書」の長谷川家における伝来を暗示する事績を見出した。長谷川秀一は、「竹」（幼名）と称し、信長公の小姓であった天正七年、安土城下で行われた「安土宗論」の筆頭奉行として、宗論を取りしきった。（この時代の専門家である小和田哲男氏による）

安土宗論とは、浄土宗と法華（日蓮）宗との間で行われた論争で、織田信長公は、この機会を捉えて法華宗を弾圧しようとした。法華宗の敗北は、宗論開始以前に決まっていたのである。

信長公の本心をしらぬ法華宗側は、この宗論の前に、妙顕寺の寺宝の一つであった、土籠御書を信長公に献上すべく、筆頭奉行の長谷川に預けたと推定できる。敗北を宣言された法華宗側は、屈辱的な詫証文を奉行衆に提出し、京都諸本寺は罰金を納めさせられ、頂妙寺日珥らは罰金を科せられた（この部分、平凡社刊・日本史大事典第一巻安土宗論の項によった）

であるから、信長公としては、この献上物を受け取ることはできなかったに違いない。主従の間でどんなやり取りがあったか分から

ないが、宗論を取りしきった長谷川竹（私の先祖）が御書を引き取ることになったようである。

長谷川竹は後に、豊臣大名長谷川秀一として越前東郷横山城十五万石を約十年間治めたのだが、彼の地に残る記録によれば、神仏に對する崇敬心の篤い人物であったようである。彼の菩提寺である福井市の永昌寺は曹洞宗である。彼の代迄は禅宗であったが、日蓮上人の「土籠御書」を子孫に伝えるにあたって、御書を粗末に扱うことのない様、法華宗に宗旨替えさせたようである。

秀一には、嫡出の男子が二人いた。長男則秀（別名・羽柴長吉）と次男吉左衛門（尾張藩分限帳では、瀬兵衛）である。御書は先ず、長男に譲られたと見るべきであろう。ところが、関ヶ原の戦（慶長五年）の前に、長男は豊臣家に残ったに反し、次男は祖父嘉竹と共に豊臣家を浪人した。後の大阪の陣（慶長十九年、元和元年）では、長男は、豊臣側で戦死し、次男の子が尾張徳川藩士（犬山城番）となったのであるから、十五年間のどこかの時点で、御書、その他を兄が弟に譲る場面があったに違いない。

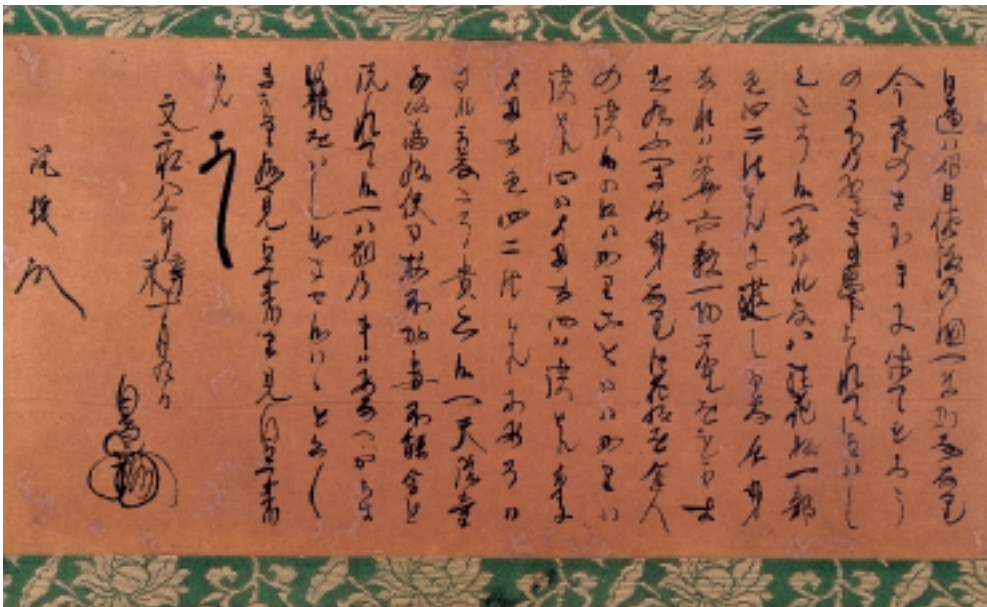
御書は、尾張徳川藩士長谷川安右衛門家に伝来し、初代安右衛門から数えて八代目の須右衛門の時に尾張徳川藩を離れて、大阪近郊の九条村に移住した時、先祖伝来の品々を名古屋から大阪迄持参したに違いない。

この書も、約三十年間、神奈川県県の拙宅（最初の十一年間は平塚市北金目の東海大学職員住宅、次の二十年間は秦野市南矢名の一戸建の家）に置いた後、仲介する人があって、昨年（平成十年）京都の本能寺宝物殿に奉納した。

日像上人の上洛が永仁二年（一二九四年）、私が、平塚市北金目の東海大学職員住宅に御書を運んだのが、昭和四十二年（一九六七年）であるから、六百七十三年間、関西地方（京都↓名古屋↓大阪）にあった後、御書が書かれた場所、相模国依知（現在の厚木市の農村部）の近くに戻っていたことになる。



(一) 表装前の土籠御書



(二) 表装後の土籠御書



長谷川秀一画像（福井市永昌寺蔵）

The original of Saint Nichiren's epistle called "Tsuchiro Gosho"

SADAKATA Akira

Nichiren, a great buddhist monk of the Kamakura period and the founder of the buddhist sect Nichiren-shu, was banished by the Kamakura shogunate to the island Sado on a charge of public agitation. Before he started for the island, he wrote a letter to his beloved disciple Nichiro who had been put in a cave prison. This letter is known as "Tsuchiro Gosho" (Letter of the Cave Prison). Today, the letter is known only through the copies. The original is said to be missing. Since some years ago, Mr. Yasuji Hasegawa, emeritus professor of Tokai University, has been making known his possessing of the original letter. I helped him to spread this news. But none of the scholars dared to approve the genuineness of this letter so far. I think it can be genuine, so I submit the materials, with Mr. Hasegawa's permission, to the investigation of the wider range of the scholarly world. The materials are the photos of the letter and Mr. Hasegawa's paper arguing for his identifying this letter with the original.